

## わが友・大平正芳先生を偲んで

姫 鵬 飛

光陰矢の如しとよくいわれていますが、大平正芳先生が故人となられてから早や一五年の歳月が流れました。優れた政治家として中日友好事業に積極的に寄与された大平先生の功績はとこしえに歴史に残り、中国人民はこの古い友人を永遠に忘れることはありません。

私と大平正芳先生の初対面は一九七二年の九月のこと、それは重要な歴史的時期であり、私個人としても忘れ難い時でした。当時、大平正芳先生は外務大臣として周恩来総理の招きを受け、田中角栄首相に随行して北京に來られ、会議を通じて中日国交正常化の歴史的使命を果たし、中日両国の間に長く存在していた不正常的状態を終結させ、日中関係史の新たな一章を開きました。その時とその後における一連の会談の中で、大平外相は政治家、外交家としてのすばらしい英知を見せています。

中日国交正常化の実現は両国人民共通の願いであり、両国の先輩政治家たちはそのために二〇数年、力を尽して来ました。一九七二年七月七日、田中首相は歴史の流れと広はんな日本人民の要求に順応して、就任早々、中国政府が提起した日中復交三原則（中華人民共和国政府は中国を代表する唯一の合法政府である、台湾は中華人民共和国の領土の不可分の一部である、「日台条約」は不法のものであり、無効であつて破棄しなければならない）を理解し・中華人民共和国との国交正常化の実現を急務とすると表明しました。それに対し、周総理は速やかに反応を示し、「これは歓迎に値する」と表明しました。時機をとら

えて中日国交正常化を実現させることは両国政府の大目標であり、この点での双方の認識は完全に一致していました。しかし、両国間の戦争状態を終結するには、まず台湾問題を解決しなければならぬ。これが国交正常化の焦点であることは周知の通りです。

「いいえ、私たち二人は平等です」

両国の総理は、小異を残して大同につくという精神に基づいて、信を本にし、胸襟を開いて意見の交換をしました。重大な原則について意見の一致を見た後、両国政府の共同声明を起草する重責が、大平正芳先生と私に与えられました。両国間の戦争状態の終結と台湾問題、「日台条約」の処理などについて、復交三原則の精神を具現すると同時に、双方のそれぞれの立場を配慮する適切な表現を見出すため、共同声明起草の中でずいぶん頭を絞りました。そのために私たちは日夜を問わずに意見の交換を続け、遊覧のため万里の長城へ赴く車の揺れ動く中でさえ、休んでいる暇がありませんでした。大平先生から少なくとも良い案が出されましたし、また先生は私の意見にも十分耳を傾けてくれました。その結果、私たちは双方ともほぼ満足できる案を作り上げました。共同声明の中で具体的に触れられなかった「日台条約」については、大平外相が共同声明発表後の記者会見で日中国交正常化の結果としてそれは存続の意義を失い終了し、台湾と日本国の外交関係は維持できなくなると宣言することになりました。これは大平先生の提案で周恩来総理の賛同を得ました。

九月二十七日、毛沢東主席が田中首相と会見し、大平外相と二階堂官房長官も同席しました。席につくと同時に、毛沢東主席は「喧嘩をしましたか。それは避けられないものでしょう。世の中には喧嘩をしない筈がない」とユーモアに富んだ口調で田中首相に話しかけました。「喧嘩は少ししましたが、問題はほぼ解決できました」と田中首相が答え、続いて周総理と田中首相は異口同音に両国外相の努力をたたえてく

れました。そして毛沢東主席は大平先生を指して私に顔を向け、「彼を打ち負かしたんだね」とジョークを飛ばしました。大平先生は首を振りながら「いいえ、私たち二人は平等です」と言い、私に向かつて目を細くして笑いました。

自国の国民の利益を守ることは外交家の天職であります。しかし、中日友好は大局と大原則であり、大局を守る共通点を見出すことがお互いの使命であることも、私たちは良くわきまえていました。したがって私と大平先生は、談判の相手であると同時に協力の仲間でもありました。たまたま大平先生と同じ歳であつた私は、先生と一緒にこの偉大な歴史的使命を果し得たことをこの上ない喜びとし、それ以来、私たち二人の間には貴い友情が生まれ、相互信頼の關係が築かれました。

## 政治的生命をかけた中日航空協定

私と大平先生の二度目の合作は、一九七四年一月のことでした。それは大平先生が田中内閣の外務大臣として、中日共同声明に基づく中日航空協定について会談を行うため北京に來られた時でした。新年早々、大平先生は、中日間に定期航路が開設されていない不便を自ら体験してみるため、特別機ではなく、定期便を利用して香港經由で北京に來られました。これもまた苦しい会談であつて、ポイントは日台航空路の處理にありました。中日国交正常化後、両国政府の話し合いにより、日本と台湾の間には航空往來を含め、經濟、貿易、人員など民間の往來を維持するだけで、政府關係の性格があつてはならないことになっています。四日間の会談を経て双方は、次のような合意に達しました。つまり、中日間の航空協定が国家間の協定であつて、日台間は地域的民間航空往來である、両国政府の共同声明により、中日航空協定調印の日から、日本政府は台湾の航空機にある標識をいわゆる国旗として認めず、「中華航空会社」を國を代表する航空会社と認めない、と。

ところが、意外なことに帰国された大平先生は、自民党内の一部議員のはげしい反対と攻撃に遭いました。大平先生は信義を重んじ、決して食言をしない方でした。三月三十一日、大平先生は当時の外務省中国課長国廣道彦氏に託した私宛の親書の中で、次のように述べています。私は誠意をもって一月六日に貴部長との間に基本的に了解された日台路線の取扱い方針を実行し、日中航空協定の調印を一日も早く軌道にのせるため、自らの政治的生命を体して鋭意努力しております。大平先生の根強い努力によって、中日航空協定はついに同年の四月二〇日、予定通り調印されました。両国人民がこそって国交正常化一周年を喜ぶ同年の九月二十七日、中日間の航空路が正式に開通し、それまで香港経由で三日間かかった北京、東京の間を、僅か四時間で飛ぶことができるようになりました。大平先生は再び、中日関係史上に不滅の功績を残されたのです。

大平先生の最後の旅となつてしまつた三度目の訪中は、一九七九年一二月のことでした。それは日本国内閣総理大臣としての公式訪問でした。その時、両国の間には既に中日平和友好条約が結ばれ、中日共同声明によつて確立された両国友好の政治的基盤は、いっそう確固としたものとなつていました。当時、私は既に外交部から離れていたので大平先生との会談には参加できませんでしたが、大平先生とわが国指導者との会談は親しく友好的な雰囲気 richness、実り豊かなものであつたと聞いております。会談の内容は、二一世紀に向けた両国の友好関係と国際情勢全般に広がり、日中友好協力関係はアジア・西太平洋地域の安定にとつて不可欠な要業であり、遠い将来においても、また、いかなる事態に際会しても、日中両国は揺るぎなく断固として友好関係を続けて行くべきであると、大平先生が強調し、中国に対する日本政府の円借款と無償援助を決定し、中日両国の全面的経済協力関係を実現させました。

大平先生は、中国がいっそう豊かになることは、よりよい世界に通ずるものであり、日本は中国の現代化実現の努力に対し、積極的に協力をしなければならぬ、と考えていました。

## 卓見と熟慮に富み信義を重んじた政治家

私は世界の多くの優れた政治家と付き合ってきたが、大平先生が残してくれた印象は実に深いものでした。大平先生は卓見と熟慮に富み、信義を重んじる政治家でいらつしやることを、私はお付き合いと仕事の協力を通じてつくづく感じております。大平先生が田中首相を補佐して中日関係の解決を決意したのは、日本人民の現在と将来の利益に立つものだけでなく、アジア・太平洋時代の到来と世界の平和と安定の維持に対する中日友好協力関係の重要な意義を予見していたからであります。

大平先生のご逝去により、中国人民は良き友を失い、これは中日友好事業の一大損失であります。新しい国際情勢に直面し、中日両国の善隣友好関係をいっそう発展させることは、さらに重要な意義を持つものとなりました。私たちは、先輩の事業を受け継ぎ、中日共同声明と中日平和友好条約の軌道に沿って、両国関係を新たな深さと広さに押し上げ、二一世紀、ひいてはより長期にわたる友好協力関係を築くため、たえず努力しなければなりません。また、これは大平正芳先生の祈願するところでもあると思います。

(一九九三年二月二七日記)

(元中華人民共和国外交部部長)

本稿は中日友好協会副会長・王效賢女士による日本語訳です。